

## これからの女性の社会進出を考える

- 男性学を取り入れた視点から -

1155163 森山夢未歌 指導教員 藤掛洋子

【背景と目的】近年日本における女性の社会進出は積極的に推奨されてきている。しかし、GEM (Gender Empowerment Measure) 順位や世界経済フォーラムの男女平等指数ランキングで日本世界にかなり後れを取っており、女性の社会進出の分野では先進国の中でもかなり低い水準にあると言える (國井 2007)。

このような状況を受け、日本ではポジティブアクション等の様々な措置が取られ、女性の社会進出に国民の目が向けられ始めてきたのは確かであるが、男性問題については社会の関心は未だに低く、ジェンダー平等のための女性学と男性学の融合的な視点も少ない。

本論文では男性学 (伊藤 1999) について取り上げ、男性の視点からも日本の労働環境やアベノミクスを批判的に論じる。また、若者の意見を参考にこれからの女性の社会進出における男性学の重要性を述べる事を目的とする。

【方法】文献・資料・インターネットによる調査、ライフコースについて本学学生 48 名にアンケート実施 (2014.11.15~30)。

【結果及び考察】アベノミクスでは「女性の活用」を政策として掲げているが、仕事と無理なく両立できる家事・育児の保障や、無償労働に対する差別撤廃は見られない。また、男性に対する施策もほとんど見られず、むしろ長時間労働や過労死を助長するような政府の思惑が窺え

る。

若者の意見では、正社員として働きたいとする女子学生は結婚後で 92%、出産後で 67%、子育て後で 75%となり、高い就業意欲が見受けられた。キャリアについても 87%がキャリアを積むことに肯定的であった。

その理由についても家庭を支えるということだけでなく、自らの社会的・経済的自立や妻・母以外の社会的役割を担いたいといった意見も多く、家庭と仕事の両立を望む声が多く挙がった。

また、男子学生については妻に M 字カーブ的な働き方を望む者も多く、完全に「男らしさの呪縛」(伊藤 1999)からは逃れきれない姿が浮かび上がったものの、33%が育児休暇取得意志を示し、63%が取得は考えずとも育児に参加したいとした。また、育児休暇取得の可否や、家庭と仕事の両立に対する不安の声も多く見受けられ、男性も他人事ではなく家庭への参加を考える時代へと確実に変化してきていると言えよう。

【結論】現状のアベノミクスのままでは若者たちが望むライフコースを実現していくのは厳しい。「女性の活用」ばかりを強調せず、個性や多様性を重要視した考え方であるジェンダー・フリーモデル (嶋根 2002) が望ましい。男性もこれまでの固定的役割から解放し、家事・育児に参加しやすい社会環境を作らなければならない。また、家事・育児に男性が参加し

女性の負担が減ることで、より効率的な  
女性の社会進出が期待できる。